



雜 錄

エミール・ブートル

勝 部 謙 造

曩にはリボト、ヅルケム相繼いで逝き、今は又ブートルトの訃音に接す、人をしてうたゝ佛蘭西哲學界の凋落を思はしめるものがある。

エミール・ブートルトは一千八百四十五年に、セトヌ縣のモンルージュに生れた。十歳にしてアンリ四世リセトに入り、後十年にして出でて巴里の高等師範學校に學び、こゝで其の師ラセリトエの甚大なる感化を蒙つた。止ること三年、千八百六十八年から七十年まで二ケ年間獨逸に行つて、ハイデルベルヒに學び主としてツェラーの講義を聽いた。歸來數年間カアンのリセトで哲學を教へて

居た。此間一方では孜孜として研鑽の功を積み、*De veritatibus apud Cartesium* 及び *De la continence des lois de la nature* なる二篇の論文を提出して、千八百七十四年にドクツォール、エス、レットルの學位を得た。

七十七年には前にハイデルベルヒで親しく教へ受けたツェラーの *Die Philosophie der Griechen* の第一卷及び二卷を譯し、爾來引繼ぎ自己の監修の下に門下生をして殘部を譯了せしめて出版した。

學位を得て後も、しばらくは田舎で教師等をして居た。其間にナンシトで醫學教授のレオン、ボ

アンカレの娘ユージンを娶つた。これはあの有名なアンリ・ポアンカレの姉妹である。

千八百七十七年には首都巴里に招かれて、エコール・ノルマルにかのフイエの椅子を襲うた。超えて八十八年にはシャネーの後を繼いでソルボンヌ大學の近世哲學史の正教授になつた。其時の就職論文は *Les Caracteres de la philosophie moderne* と云ふのであつた。

九十三年には、かの千八百七十四年の學位論文 *De la contingence des lois de la nature* と共に彼の主著となせる *De l'idee de loi naturelle dans la science et la philosophie contemporains* と云ふ、大學に於ての講義を出版し、又九十七年には *Etudes d'histoire de la philosophie* を上梓して居る。

其他彼には數種の有益な著述及び色々な雜誌に隨時發表した貴重な研究論文が多數ある。最近世界大戰亂突發するや、彼は筆を呵して盛に自國の

立場を辯護し、又獨逸文化に對して鋭い批評を試み、以て祖國の爲めに萬丈の氣焰を吐いて居た。今や擴古の大戦も漸く終りを告げ、宇内の群星悉く彼の國の古都ベルサイニに集り、哲人の理想たる永劫の平和を締結せんとせる時、卒然として此騷壇の勇將を失ふ、まことに惜しむべしである。

ブートローの思想には二つの注目すべき核心がある。それは偶然性 *contingence* と斷續性 *discontinuité* といふ。

偶然性と云ふ事を主張するにつけては、彼はヒュームや、ステワルト・ミル等と同じく因果法則の必然性を拒んで居る。彼の云ふ *contingence* なる語をばこゝには偶然性と譯してよいが、これは必らずしも適譯ではない、寧ろ「自由」と云う方が一層當つて居るかも知れぬ。これは「さうでない事も有り得る」 *auch anders sein können* と云ふ

のであつて全くの偶然ではない。彼自身の語で云ふと *contingent* であつて *hasard* ではない。もし後者を以て萬物の父とするならば世界は全くの混亂に過ぎないだらう。

一體必然性といふ事を許す根據は何處にあるのか。ある關係が必然的であるといふ事はどうして云へるか。最もよく分る例は分析的命題のあらはして居る關係である。これは必然的であるとも云へる。主辭の中にふくまれて居る賓辭、即ち「普遍」の中に潜在せる「特殊」を抜き出すのであるから、必然的でなければならぬ様である。然し實際に於て眞に純粹分析的な命題と云へば唯一つしかない。即ち $A \parallel A$ と云ふ同一命題のみが純粹分析的關係をあらはして居る。これは成程必然的には違あるまいが、然し主辭と屬性と全く同じものであるから、我々に新しい知識を與へない、全く無意味である。さうすると問題は多少の綜合を交

へた分析的命題を純粹分析命題に還元することが出来るかどうかといふ點に歸着する。これは然し無理である。例へば *Tous les hommes sont mortels* と云ふ命題があるとす。これは即ち *homme* と云ふ種 *espèce* が *mortel* と云ふ屬 *genre* の一部分であるといふ事を示しては居るが、此の *homme* の數と *mortels* の數との關係は全く未決定のまま残されてある。だからして更に云ひ換ふるとこれは *Tous les hommes \parallel mortels* と云ふ事になる。論者或は科學が進歩するに連れ、*genre* 中に包括される *espèce* をば充分に正確に決定し得るやうになるだらう、従つて完全な科學には此 \parallel といふ記號は悉く *est* と云ふ繫辭に代り得るのであると主張するかも知れぬ。然しこれはまことに笑止な話で、其様な完全な科學になるがための道具としてこそ論理命題がこゝに問題になつて居るのであつて、科學が既に完全になつて居るならばそ

の様なものは全く無用である。

然らば必然性の根據をばカントがやつた様に先天綜合命題に求める事が出来るかどうか。先天的と云ふからには、此命題の成素も又成素間に成り立つ關係も決して經驗から來たものであつてはならない。今かういふ先天綜合命題として二つの關係を考ふる事が出来る。即ち合目性の關係 *Faithfulness de finalité* 及び因果性の關係 *rapports de causalité* がこれである。

此二つの關係について考へて見るに、前者が必然性を備へて居ない事は容易く解る。如何なる目的でもそれが必然的に實現されねばならぬと云ふ事はどうしても許されない。何となればこれとは全く違つた無限の場合が可能である、従つてこの事件が起る機會は無限數に對する一の割合にしか可能でないからである。

然しもう一の因果性の方はさうではない。これ

には全く可能も偶然も許さない。従つてこれがもし先天的のものであるならば、全く必然性を備へたものであることを許さねばならぬ。然し實際はこの因果法則には確實性 *certitude* をば要求し得ようが必然性 *necessité* は期待する事が出来ぬ。

全體因果法則なるものは先天的に與へられるものではない。もし原因といふことをば形面上學的に創造力 *puissance créatrice* と解する事が出来るならば、いかにも因果法則は先天的であるかも知れぬが、然し此立場を保持する事は不可能である。因果法則は結局其正確な意味を取つて見ればかうである。即ち「凡て事物に起る變化は如何なる變化であつても悉く必ずその條件となる他の變化と關係して居るものである。而してそれもある任意の變化と關係して居るのではなくて、條件を加へられた變化には條件の中に含まれて居る以外の何物をも含まないと云ふ様な性質の變化と關係して居る

ものである」。(De la contingence... p. 21) して見ると此命題中には何等の先天的要素も含まれて居ぬ。全く經驗的なものしか表はして居ない。故に因果法則といふものも決して先天的のものではない。これは只科學の實際的便宜のための原理に過ぎぬ。凡て生起する事は悉く必然に起るのも又無暗に起るのもなくて、contingentに起るのである。

かく論理上から必然性を確立することは全く失敗に歸したが、然し或は科學に於て實際上、實驗とか計算とかによつて事實上の必然性 *necessité* *de fait* といふ様なものを立てる事は出来まいか。これも六かしい。一體因果法則は現象間のありとあらゆる關係を最も普遍的に表はしたものであつて、これは一の抽象的の形式に過ぎない。まして精密科學に於て原因結果の關係を正確に測定するといふやうな事は出来ぬ仕事である。元來現象と

はどこから初まりどこに終るものであるかも明かでない。いはんや因果間の關係を測定して其等量であるのを證明する事はもとより不可能な事である。なぜといふに等量といふやうな事は、精密に云へば純粋量を取扱ふ場合又は同性質間の關係に於てのみ云ふ事の出来るものである。既に原因から結果を生じたからには、結果は原因とは性質に於て違ふ點があるべきである。だからして此兩者間に等量の關係を定むるといふ様な事は勿論出来ない。

要するに必然性といふ事は到底保持し難い事となる。故に凡ての變化生成は、必然性如き窮極な原理にしばられて然るにはあらずして、偶然に、自由に然かなれるのである。萬物の根柢に *contingence* を認めなければならぬ。

次に斷續性とはどういふ事を云ふかといふに、

これはかのコントが學問の階梯を建て、各種の科學にそれ／＼特有の領域と原理とを許して以來、佛蘭西哲學に於ける一の傳統とも云ふべく、ブールに至つては殊に主知的靜止的機械觀に激しく反抗すると共に、實在を一連續として普遍的に觀る事を拒んで居る。即ち色々の科學の取扱ふ色々な經驗世界は相互に還元する事を許さぬ、其間には飛び超えねばならぬ深い溝渠がある。科學は最も普遍的な數學及び論理學のやうなものから、漸次進みて具體的になる力學、物理學、化學、生理學、心理學、社會學と云ふものがあるが、これ等の學問の取扱ふ對象は悉くそれ／＼多少異つた新しい分子を含んで居るものである。普遍的抽象的なものから特殊的、具體的なものを抽き出す事は出來ぬ。例へば數學からして力學を抽き出す事は出來ぬ。力學の原理には數學には含まれて居ない新しい「あるもの」が入つて居る。以下皆

彼の列べた順序に従つて前者から後者を抽き出すといふ事は出來ない。即ちこれ等の經驗界は皆一様に連續したものでなくして、これ等を對象とせる科學には、皆それ／＼概念的思惟から來たものではないところの、公準 *postulate* と云ふものが許されてある。これは全く我々の直觀 *intuition* によつて得來つたものである。この點が即ち前述の *contingence* の這入つて來る處である。

一體科學には直觀と觀念との兩方を必要とする其いづれか一方を缺いても完全な仕事は出來ぬものである。偕此直觀作用によつて得來る公準と云ふものは只科學に必要な許りでなく、更に同一の公準が我々の實行にも必要である。科學と實行との間には非常な類似點がある。只違ふ處は科學は法則を保持せんが爲に直觀を除去しようと力め、實行は最も充實せる、すなほな、自由な存在を實現しようとして法則を吞過する點である。

而して此科學或は知識と實行との共通の根源がある筈であるが、それは即ち理性 *reason* である。理性の理論的機能が働いて知識となり、實際的機能が働いて實行となる。而して科學の手の届かぬ、此理性其者の活動發展をあらはす思辨が即ち哲學である。

最後にブートルルの人生觀を略説して、それで本稿を結ばう。

完全な調和的な生は決して先天的概念の對象ではない。これは建設的創造である。凡ての存在物

中 島 教 授 薨 去

大正七年十二月二十一日東京帝國大學文科大學教授文學博士中島力造先生薨去せらる。

先生は安政五年正月八日京都府下福知山町に生

は皆それ／＼一の個體であつて、より低い生活形式に歸すことの出來ぬ特性をもつて居る。ある人間と他の存在物との間には、程度の差ではなくて、本質的の差異がある。人は自己の品性の奴隸ではなくて、その創造者である。人の行爲は其人の品性によつて決定されるものではなくて、却て品性はその人の行爲に依憑して居る。我々の存在の根とも云ふべきは「自由」である。これが即ち絶えず我々を驅つて、神に近づかしめる我々の内に於ける創造力である。

藤 井 健 治 郎

れ、幼時藩立惇明館に習ひ、長ずるに及んで京都同志社に學び、居ること二年にして笈を負うて遠く米國に遊び、ウエイスターン・ゾルフ・アカデミ